



風疹(ふうしん)とは

風疹は発熱、発疹、リンパ節の腫れを主な症状とするウイルス性の感染症です。子供に比べて大人では症状がやや重くなることがありますが、入院が必要になることは稀です。風疹そのものは重度な感染症ではありませんが、妊娠5ヶ月までの妊婦が風疹に感染した場合、胎児に重大な異常「先天性風疹症候群」が起こることがあり、それには最大限の注意が必要です。



先天性風疹症候群(せんてんせいふうしんしょうこうぐん)について

妊婦が風疹に感染すると、胎児も風疹に感染し、目の病気、耳の病気、心臓の病気などが起こることがあり、総称して「先天性風疹症候群」と言います。中には障がいとして残るものもあります。



先天性風疹症候群は妊娠初期の妊婦が風疹を発症した場合ほど、起こる可能性は大きく、妊娠1ヶ月で50%以上、2ヶ月で35%、3ヶ月で18%、4ヶ月で8%、6ヶ月以降でほぼ0%という統計があります。なお、妊娠3~4ヶ月に感染した場合は耳の病気(難聴)のみのことが多いのですが、妊娠1~2ヶ月に感染した場合は複数の病気が合併する可能性が大きくなります。

風疹にはウイルスに感染しても症状の出ない感染(不顕性感染(ふけんせいかんせん))があり、それは感染者全体の15~30%程と推測されています。症状が出た場合ほどではありませんが、不顕性感染であっても胎児が先天性風疹症候群になることがあります。そのため、妊婦が知らない間に風疹に感染し、生まれてから子供が先天性風疹症候群であることが判るケースもあります。

先天性風疹症候群を防ぐには

生まれつきの異常の多くは不可抗力で起こります。しかし、風疹の免疫をつけることは禁煙、禁酒、葉酸摂取と並び、生まれつきの異常を減らすことができる数少ない手段の1つです。



免疫は予防接種によりつけることができますが、予防接種を2回受けても免疫がつかない人が約1%います。また、「先天性風疹症候群の子供を出産した女性の5人に1人は風疹の予防接種を受けていた」、「女性への感染経路は1位 夫、2位 職場」、「女性が免疫を持っていても身近に風疹患者がいると胎児への風疹の感染が起こり得る」という事実があります。

妊娠を希望する女性が風疹の免疫をつけることは先天性風疹症候群を減らすことに繋がりますが、それだけではゼロになりません。「過去に風疹になったことがない人」(但し、風疹になったことがあると思っている人の半数は、実際には麻疹やりんご病などの風疹に似た病気だったと考えられています)と「2回の予防接種を受けていない人」が、性別や身近に妊婦がいるかなどに関係なく予防接種を受けることで、先天性風疹症候群で生まれてくる子供をゼロに近づけることができます。

風疹は不顕性感染であってもウイルスを排出するため、知らない間に他人の人生に大きな影響を与えてしまう可能性があります。先天性風疹症候群を防ぐには、社会の全員が風疹への免疫をつけることが理想です。風疹への免疫があるかの検査(抗体検査)や予防接種は内科や婦人科などで受けることができ、費用を助成している市町村もあります。